

室町時代後期 清原家伝来 古鈔本『論語集解』について

清原枝賢本の伝鈔

高橋 智

目次

- 一、序
- 二、清原宣賢手定本
- 三、清原枝賢伝来本
- 四、釈梵舜の伝鈔
- 五、吉田兼右の伝鈔
- 六、三十郎盛政の伝鈔
- 七、その他の伝鈔
- 八、結語

一、序

室町時代以前の『論語』古鈔本（古写本）の研究は、中世儒学史研究の大きなテーマの一つである。三世紀と言われる最も早い時期の漢籍受容書であることから、日本に於ける漢字文化の基礎となり、古くから古写本による伝承が重んじられた『論語』は、現存する漢籍の古写本の総体から見ても、その量の多さは群を抜いている。外典中、最古の出版物と言われる

正平版『論語』（正平十九年＝一三六四）や博士家の監修による天文版『論語』（天文二年＝一五三三）の開板、また、中国に亡んだ梁皇侃の『論語義疏』の古鈔本による伝承、など、学問史上特記するべき現象が存在したのも、『論語』ならでのことであつたらう。

その『論語』の伝承は、専ら魏の何晏の集解本が中心であり、『義疏』本はそれを圍繞するように影響を与えてきた。集解本の伝承は、十三世紀を上限とし、それ以上遡る古鈔本は遺らない。そして、南北朝期に幾つかを存し、また、室町時代の前期にはほぼその間の鈔本（写本）と思われるものは皆無に等しい。却つて、室町時代中期から特に後期には、吹き出すようにその古鈔本の伝存が多くなる。従つて、南北朝以前の古い古鈔本の研究もさることながら、室町時代の古鈔本の性格と意義を整理する試みも、また、中世史研究の重要な一側面をなすものと考えられるのである。

ここでは、その室町時代中後期の儒学史を担つた博士家の立役者・清原宣賢の学統を、中世期最後の博士家を取り巻く人々がどのように伝承していったかを、『論語集解』の古鈔本を通じて、とりわけ清原枝賢に注目しながら、伝本の系統を明らかにし、室町時代後期の清家本の姿を明らかにしてみようとするものである。

## 二、清原宣賢手定本

清原宣賢（一四七五～一五五〇＝文明七年～天文十九年）は、吉田兼俱の三男として、吉田神道の家に生まれ、清原宗賢の養子となり、室町時代中期から後期にかけて、博士家清原家学の再興を果たした中世の大儒である。号は環翠軒。また、剃髪して宗尤と号した。

宣賢の儒学書に関する学術活動の特色は、とりわけ気迫のこもつた鈔本を自ら幾つも作り、その際に、家伝の鈔本に加え、新渡来の中国刊本を参照して校勘を行い、それを定本として定め伝えたことで、天文版『論語』などの出版事業に協力、

『論語聽塵』などの講説書に見られるような、講義講説にも積極的であったことなど、それまでの古い清家本や清家訓点を集大成し、経書の解釈講読に新基軸を興し、その普及に努めたことが挙げられる。今に、夥しく遺される、宣賢点と称する経書の古鈔本や刊本への移点本は、その学問が如何に権威あるものであったかを物語る証である。例えばその手定の例は、京都大学附属図書館に所蔵される清家文庫などによると、永正十一年に『尚書（書経）』、永正九・十年に『毛詩（詩経）』、永正十二年に『春秋経伝集解』、永正十三年に『孟子』などと書写・写点を行っている自筆本が現存し、勢いの凄まじさは目を見張るものがある。

『論語集解』の定本は、その自筆附訓本（本文は周辺の者に令写）が京都大学附属図書館蔵（貴重書）本（一冊）として現存するが、存巻六〜十の零本で、かつ単経本である故に、手定の由来と全貌を見ることはできないが、幸い、宣賢点の由来を明確に伝えた伝鈔本（もとの鈔本を更に転写したもの）が四本伝わり、その四本に記された宣賢の本奥書（もとおくがき）によって、永正九年（一五二二）、宣賢三十八歳の時に定本を定めたことが判明するのである。その四本は、次のものである。

京都大学附属図書館蔵（6606）	室町末近世初期写	伏原宣條・宣光所持本	二冊
大阪府立図書館蔵（甲和153）	永禄元亀頃（一五五八〜七二）	釈梅仙写	五冊
神宮文庫蔵（515）	大永三年（一五二三）	林宗二写	三冊
神宮文庫蔵（488）	江戸初期〜前期写	養鷗徹定（一八一四〜九一）	手沢 五冊

つまり、これらの伝本には、

「永正九年正月十五日以累家秘本書写之即加朱墨訖

少納言清原朝臣 判」

と言った宣賢の奥書が随所に写し遺されているのであって、宣賢の定本に依って書写移点を行った、第一次宣賢点移点本と

称し得るものなのである。さて、その訓法が如何なるものであったかは、慶長刊本『論語集解』を参見するのが最も便利である（拙著「慶長刊論語集解の研究」、『斯道文庫論集』第三十一輯・平成九年参照）。中世の末期（十六世紀後半から十七世紀初頭）、朝鮮より輸入された木活字印刷の技術によって一世を風靡した古活字版は、テキスト自体、博士家本に依つたものであり、そこに附された書き入れ墨筆の訓点は、伝承者によって完成された、洗練された宣賢点の姿であつたからである。そして、こうした宣賢点本が、慶長期を経て江戸時代を迎えるまで、どのような伝承がなされていたのかは、中世儒学史を総括する上で重要な一項目となるのであつて、その研究には、宣賢の孫・枝賢による宣賢点伝承の把握が必須であることを、以下に示す幾つかの伝鈔本が如実に物語っているのである。

### 三、清原枝賢伝来本

枝賢は、宣賢の男、良雄（始め業賢と称す、一四九九～一五六六〃明応八年～永禄九年）の子にして、すなわち宣賢の孫にあたる。明経博士、号を三陽院と称した。一五二〇（永正十七年）生、一五九〇（天正十八年）没。宣賢の学統をよく守り、子・国賢（一五四四～一六一四〃天文十三年～慶長十九年）、孫・秀賢（一五七五～一六一四〃天正三年～慶長十九年）と続く室町時代末近世初期の清原家学三代を築いた人である。清家の経書解釈は、宣賢以後、新しい解釈を生むことはなかったが、南北朝以前の古い家学の訓読に戻ることもなく、新渡来の中国刊本を吸収した宣賢のテキストを墨守して、安定した宣賢点本の講読を行っていた。従つて、清家室町末期三代は、中世期の博士家儒書講読の結実期を迎えたわけであるが、その実は、中興の祖である宣賢の点本について、その流布に与つたことにこそ、その功績を認めることができるであろう。

枝賢が『論語集解』をどう伝承したか、現存の幾つかの資料が、実態を伝えている。その圧巻は、永正九年・十七年（一五二二・一五二〇）に宣賢が定めた点本を、天文二十年（一五五二）、枝賢三十二歳の時に移点し認められたテキストで、白河

楽翁（松平定信）旧蔵にして現在、東洋文庫に伝わっているものである。言賢が没したのは天文十九年であるから、移点は、その翌年に当たる。伝承の生々しさを語っている。しかし、当時の家学は、若年より幾度となく書写伝承に携わるのが通例で、枝賢はさらに若く、天文五年、十七歳の時すでに嚴父良雄の命により『論語集解』の書写に当たっていた。先ずはその事実を示す京都大学蔵本から見てもよ。

京都大学附属図書館蔵（16605）

論語十卷 魏何晏集解 天文五年（一五三六）清原枝賢令写

天文八年（一五三九）清原良雄証明 二冊

薄茶色艶出表紙（二十七・五×二十・三）。表紙に「圓珠経 宇（寅）」と墨書する。この手は本文と同筆である。次に、何晏の序文を冠す。

論語序

叙曰漢中壘校尉劉向言魯論語二

十篇皆孔子弟子記諸善言也太子

・  
・  
・  
・  
・

次に巻第一の本文がくる。

論語学而第一 何晏集解

子曰学而時習之不亦說乎……

注釈は小字で双行に入れる。また、「論語学而第一」の右側に、本文同筆の書き入れがあり、「論語卷第一 才ナ（才は摺の省略と考えられる。ナの子は、有を省略して記す）」と墨書する。これは宣賢本以来の校勘のメモである。「論語卷第一」の題が、摺本、つまり、印刷本（刊本）には存在する、という意味である。おそらく、摺本とは宋版系のテキストを指すであろう。実は、こうした本書への校勘メモ書き入れは、後に示す天文二十年（一五五一）枝賢奥書本（東洋文庫所蔵）よりもやや簡略に止まるが、原型は宣賢本に求めることができる。

もう一つ注意すべきは、この巻第一の形式に枝賢本の特徴がよく現れているということである。そもそも宣賢本の特徴は、「論語学而第一」と「何晏集解」の間に「凡十六章」と章数を加え、更には「不亦說乎」を「説」に作って「悦」に作る他本とは一線を画すことにあり、宣賢本を忠実に移写している枝賢本ではあるが、こうしたわけか、巻一卷頭のみは、この章数を欠く。そして、枝賢本の系統はみなそれを襲っているのである。ここに、中世期伝鈔本の受動的規範性が感得されるのであるが、いずれにしても、字様・訓読書き入れ・書写の形式などの類似性は逆にテキスト分類の大きな拠り所ともなるのである。

書写は、毎半葉七行、毎行十四字、小字双行で墨の匡郭は二十一・七×十八・三cm、各界の幅は二・七cm。料紙は厚手の楮紙。柱には何も記さず、丁付も無い。本文・注ともに全巻一筆で、附訓（返り点・送りがな・附訓・縦点）、音注、校異、フコト点（これは朱筆）など全て一人の手によって加えられ、なおかつ本文書写者と同一人と考えられる。（ただし、衛靈公第十五の第一〜七丁、子張第十九の第三丁はそれぞれ別筆である。子張の箇所はあるいは枝賢の自筆に係るか。）尾題は、「論語卷第一」とし、その下に小字双行で、「經一千四百七十字」「註一千五百一十五字」と経註字数を加える。巻十まで同様である。

また、宣賢本の系統に属する、

京都大学附属図書館蔵（書9088）

論語十卷 存卷六、十 魏何晏集解・単経本 室町時代写 宣賢自筆附訓 一冊

と引き比べると、本文の字様が非常によく似ていると感じられる。清家に仕えた複数の右筆による世襲的性格を表すものか、あるいは、天文五年、宣賢が令写した際に、枝賢も同人に令写したのであるうか。当時の公卿による日常の学術活動は、こうした資料から推測して、興味が尽きない。そこで、本書の成立について、末尾に付された二通の奥書を見てみよう。先ず、卷十末に記された清原良雄（枝賢の父）の自筆奥書

此書全部仰息男枝賢令書写之

以累家秘説加朱墨両点輒莫許

電覽而已

天文八曆仲春吉曜日 給事中清原朝臣（花押）

やや柔らかみを帯びた曲線状の特色ある字様の、この奥書は、「息男枝賢」という表現から、良雄（業賢）の筆であることがわかるもので、意は、本書の成立を枝賢の令写に委ね、父宣賢の訓点を移点せしめ、些かなりとも家人以外の者の閲覽を許さない旨のものである。

更に、その書写に関わった枝賢が自ら第一冊末（巻五末）に記した奥書には次のようにある。

魯論兩冊応亡父三位之嚴命 遂

書写之功今屈指四十以往也嗚

呼歳不我述矣後卷雖令亡父卿

証明累葉之秘点不漏一事故為

禁他見重不加制筆而已

天正四年林鐘二十日

司業清原朝臣枝賢

魯論すなわち『論語』二冊は、四十年前に父良雄の命で書写移点したものである。と。天正四年（一五七六）は、枝賢五十七歳、父良雄が永禄九年（一五六六）に没してから十年後のことである。従つて、四十年前とは、枝賢が十七歳すなわち天文五年（一五三六）、宣賢六十二歳の時である。経緯を少しくまとめてみるならば、

天文五年（一五三六）宣賢六十二歳 良雄三十八歳 枝賢十七歳（『論語』令写）

天文十九年（一五五〇）宣賢没〓七十六歳 良雄五十二歳 枝賢三十一歳

永禄九年（一五六六） 良雄没〓六十七歳 枝賢四十七歳

天正四年（一五七六） 枝賢五十七歳（『論語』加証）

天正十八年（一五九〇） 枝賢没〓七十一歳

と、概観される。枝賢はまた、天文十九年の四月、宣賢が没する直前に、十一代前の先祖清原良枝（建長五年〜元弘一年〓一二五三〜一三三一）の筆と伝える『論語集解』（京都大学附属図書館蔵・1-6606）に加証奥書を記している。更に、天文



二十年に宣賢点本の移点を行い、永禄九年には、天文版『論語』初印本への加点を証し（慶應義塾図書館所蔵132x160）、元龜二年（一五七一）には正平版『論語』（無跋本）に加点を行っている（東洋文庫所蔵・二二c4）。

それぞれの奥書は、

京大本「夫以齊家治国之要莫過乎此書……清家中興穀倉院別当正四位下行大外記清原良枝朝臣入道了空之真跡天文庚戌夏

四月日 清原朝臣枝賢「東」（朱印）」

慶應本「永禄歳舍丙寅菊月二十又九袖此一冊索後証家点恰如一器水於移一器勿令聴電覽矣……司農卿清原朝臣「枝／賢」

（朱印）」

東洋本「右魯論者人倫之大用也時習可也玩索而覚気味深長者乎于爰不干翁專仏教余志儒術求累家秘点不及猶豫拭淚眼染禿筆

加朱墨……元龜第二歳舍辛未春二月初八宮内卿清原朝臣（花押）「枝／賢」（朱印）」

このように枝賢は、祖父・厳父が世を去る時に、家本の証明に墨付きをする、まさに連綿伝持の経学伝承の典型を体していたと言える。

振り返って、本書の天文五年の書写は、ここに見る枝賢の自筆奥書とは別筆と見られ、写本自体はやはり清家に仕える右筆の手になると考えられよう。訓点は前記・京大本（費のり）宣賢自筆附訓本（単経本）と全く同一で、注文も含めた、宣賢の忠実な訓を家に伝えたものとしては、最も古いテキストとして甚大な価値を有する一本である。

また、本書の大きな特徴と言えることに、宣賢が定めた定本には「才（摺）本」という別本の異同が事細かに記されるが、その校異を受けて「才本」の正しいと思われる箇所を「才本」の校異に従って訂正していることである。例えば、学而篇、「子曰導千乘之国」に宣賢が「道才作」と記し、才本は「道」に作るとしているが、本書は、それを「子曰道千乘之国」と変えて書写しているのである。こうした例は少なからず見つけられ、また、おしなべて、宣賢の定本に比して「也」「之」「者」などの助字を削除している箇所が目立つ。そして、この変化が枝賢本の定本となって、後に述べる梵舜本などの系統

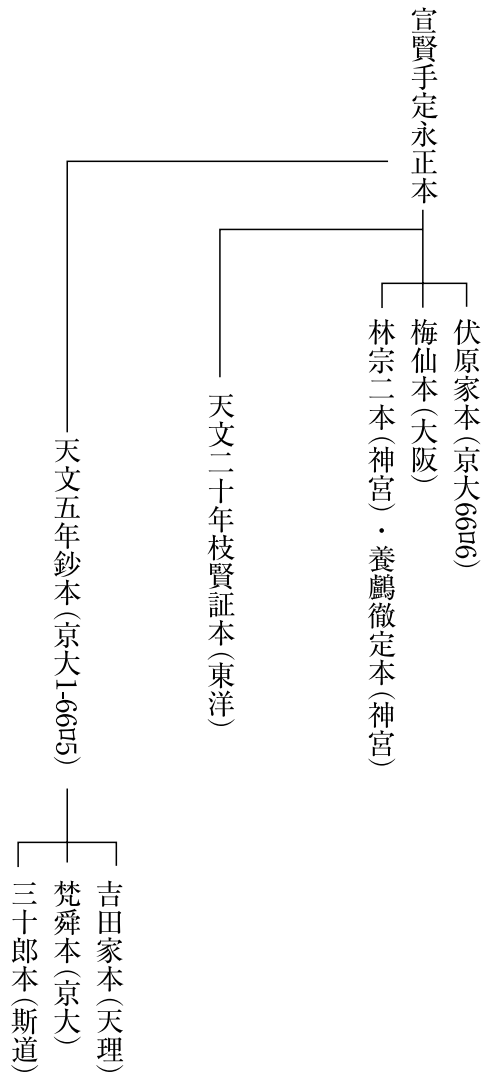
を生むことになる。

従って、本書は、宣賢が永正九年に定めた手定本を受け継ぎながら改訂したもので、永正本を伝鈔した第一次宣賢点移点本に対して、第二次宣賢点移点本と名付けることができ、しかもそれは、良雄・枝賢の手によって伝鈔されたと考えられるのである。

本書には、「船橋蔵書」の印を捺し、後期三代、舟橋秀賢の伝承を経て今日に至っているものである。

次に、宣賢の永正九年・十七年（一五二二・一五二〇）加点証本を、忠実に伝え、天文二十年に枝賢が奥書を認めて定本とした伝鈔本について見てみよう。本書（東洋文庫蔵本）は、前記天文五年加点本よりも校異や音注などの書き入れが多く、つまり、天文五年鈔本のように、宣賢本の校異に従って本文の字句を改訂しているテキストとは違い、宣賢本の第一次移点本とも言える、伏原家本・梅仙本・林宗二本などに近く、それよりもやや校異が詳密であると見られる。その付加された校異は宣賢のものか、枝賢が加えたものか、分からぬが、この枝賢伝持の宣賢点本は、第一次移点本と、天文五年鈔本の系統となる梵舜本や吉田家本などの第二次宣賢点移点本の中間に位置するもので、宣賢点本と枝賢本の繋がりを知る上で極めて重要な一本である。本書の位置を図示すれば次の「図1」ようになる。

〔図1〕



東洋文庫所蔵 (1C41)

論語十卷 魏何晏集解 室町時代後期写 永正九・十七年宣賢点本

天文二十年枝賢証本 五冊

薄茶色の古表紙、二六・五×二一・七cm。題簽は江戸時代初期頃と思しき丹色の料紙に、本文とは別筆にて「論語之二」などと記す。第五冊目の題簽には「論語 九之十/清原枝賢朱墨秘本」と墨書する。何晏の論語序は、

論語序

叙曰漢中壘校尉劉向言魯論語二

十篇皆孔子弟子記諸善言也太子

・  
・  
・  
・  
・

で京大蔵天文五年写本と字詰めも同じで、字様もよく似る。東洋文庫本には、「論語序」の右に「世？論語序有注」と、「壘」の左に「力軌反」、「校」の左に「戸教反」、「向」の左に「舒尚反」、「太」の左に「泰」とそれぞれ校異・音注を加える（本文同筆）。こうした書き入れは、枝賢系の写本には皆受け継がれているもので、ただし、「世？論語序有注」の批校は本書のみに加えられる。巻一巻頭も序首と同様、京大本とよく似る。しかし、校異は一層詳しい。

論語学而第一 何晏集解

子曰学而時習之不亦說乎……

章数を欠く。ただし巻二以降は欠かない。題式に関する校異は「論語学而第一」の右側に、

摺本疏釈文並無論語兩字但古本有之

論語卷第一才有

（摺本つまり印刷本や注疏本、經典釈文には「論語」の二字が無く、古本にはある。才は摺の略。印刷本は別に「論語卷第一」と題している）

また、左側に

二字才无（「論語」の二字は摺本には無い）

とあり、「何晏集解」の右側に

疏并釈文此篇外無何晏集解四字是随略歟

何晏二字疏有釈無

四字摺本有

音義曰一本作何晏集解

(注疏本や經典釈文は学而篇以下には「何晏集解」の四字は無い。また、「何晏」の二字は注疏本にはあるが經典釈文には無い。摺本には「何晏集解」の四字がある)

とする七種の校異が小字で本文同筆にて加えられる。本文にも、「説」の左に「悦注同」などと同じく本文同筆で音注が附される。無論、こうした校異の元となったテキストの同定を試みることも重要であるが、中世期の博士家を取り巻く諸本の環境は複雑にして、容易な推測を可能にしない。

書式は、每半葉七行、毎行十四字、墨界の寸法は二十・七×十七・五cm。各界の幅は二・六cm。料紙は斐楮交漉紙。尾題は「論語巻第一」などと巻十まである。またその下に経注字数を加えること京大蔵天文五年写本と同様である。

本文は一筆で、ただ巻六のみは別筆であるが、他と同時代の書写に係る。書き入れも前述の如く同筆で(巻六は巻六本文と同筆)、訓点(返り点・送り点・附訓・縦点・声点)を加え、朱のヲコト点を打つ。欄外の書き入れも少々見られ、江家本の説を引くものがあるが、宣賢点本の忠実な写しである。また、本文と同筆にて、宣賢の永正年間の奥書を各巻末に移写している。

### 【巻一末】

永正九年正月十五日以累家秘本書写之即加朱墨訖

少納言清原朝臣 判

文字増減年来不審以数多家本雖令校合共以不一揆

爰唐本不慮感得之間即校正之處相違非一旦古本之躰  
今非可改易仍脇注之兩存焉就家說於無害之文  
字者以朱消之是又非憶說黃表紙家本如此後來以此  
本可為証者乎

永正十七年九月二十三日 給事中清原宣賢

宣賢一一一一

枝賢一一

此本康雄令 / 借用之遂講 / 談之切者也

【卷二末】

永正九年正月二十日以累家秘本書寫之即加朱墨訖

少納言清原朝臣 判

以唐本校了

宣賢一一一一

枝賢一一 妙法發起講之 / 進 郎賢光發起講之

【卷三末】

永正九年正月二十四日以累家秘本書寫之加朱墨訖

少納言清原朝臣 判

以唐本校了

宣賢一一一一

【卷四末】

永正九年正月二十九日以累家秘本書写之即朱点墨点訖

少納言清原朝臣 判

宣賢一一一一 以唐本校正了

【卷五末】

永正九年正月三十日以累家秘本書写之加朱墨两点訖

少納言清原朝臣 判

【卷七末】

永正九年二月四日以累家秘本書写之加朱墨訖

少納言清原朝臣 判

【卷八末】

永正九年二月六日以累家秘本書写之即加朱墨点訖

少納言清原朝臣 御判

宣賢一一一一

【卷九末】

永正九年二月七日以累家秘本書写之加朱墨訖

少納言清原朝臣 判

宣賢一一一一

【卷十末】

此書文増減字異同多本共以不同以唐本欲決之  
未求得之專以当家古本取準的書写之卒終朱

墨功訖

永正九年二月九日 少納言清原朝臣 御判

宣賢一一一一

文字増減年来不審以数多家本雖令校合共以不一

爰唐本不慮感得之間即校正之処相違非一旦古本之

躰法今非可改易仍脇注之両存焉就家説於無害之

文字者以朱消之是又非憶説黄表紙家如此類有之

後來以此本可為証者乎

永正十七年九月二十三日 給事中清原宣賢

更に枝賢の自筆の奥書が四箇所に見える。(本文や宣賢の本奥書とは、非常に似ているが、別筆のようである)

【卷二末】

右加一覽之処家本無相違勿令

外見矣 大外記兼博士清原朝臣枝賢「東」(朱印)

【卷六末】

右加一覽之処無相違可謂秘本六卷一冊故

外史康貞闕如之依之康雄補闕拾遺而写家説



朱墨点不漏一事勿令外見矣

大外記兼博士清原朝臣枝賢「東」(朱印)

【卷四・八末】

右加一覽之处家本無相違勿令外見矣

大外記兼博士清原朝臣枝賢「東」(朱印)

【卷十末】

夫以齊家治国之要莫過乎此書以孝鳴者顏曾也

以德鳴者孔孟也以半部鳴宋趙晉也況於學者乎不可

不時習鳴乎一寸璧玉也漢家本朝賞之翫之可謂

龜鏡鴻宝而已故以累家秘本加朱墨両点勿令出深

窓矣

天文辛亥秋九月重陽 從四位上行大外記兼博士伊豫介清原朝臣枝賢「東」(朱印)

以上により、このテキストの由来が明かとなるのである。「桑名文庫」「立教館/図書印」「白河文庫」印を各冊首に捺し、寛政の改革で有名な松平樂翁定信(一七五八〜一八二九)の旧蔵であった。「向黄邨/珍藏印」(陰刻)印があり、明治の漢学者向山黄邨(一八二六〜一八九七)の手を経て和田雲邨に伝わったものである。

## 四、釈梵舜の伝鈔

枝賢本の伝承者に、梵舜がいた。釈梵舜（天文二十二年～寛永九年＝一五五三～一六三二）は、宣賢の男で神道吉田家に入った吉田兼右（永正十三年～元龜四年＝一五一六～一五七三）の男。兄に兼見（天文四年～慶長十五年）がいた。順番から言えば、父兼右が先に論じられなければならないかも知れないが、梵舜は、とりわけ宣賢・枝賢の経学を受け継ぐこと綿密で、慶長十七年（一六一二）に古活字版『孟子』（内閣文庫蔵）に宣賢点を移点しているのなどは、宣賢学の本質を完璧に伝えた定本で（拙論「古活字版趙注孟子校記」、『斯道文庫論集』第二十八輯参照）、従兄弟に当たる枝賢とも伝鈔本に関する連絡があり、元龜年間、清家本流の枝賢などの活躍を、家外にあつて興隆せしめた重要な人物であつたから、その伝承は宣賢・枝賢に最も近く、本家船橋家の国賢・秀賢にも増して、迫力あるものと思われ、『論語集解』の伝鈔本も枝賢本の姿をよく伝えていることにより、ここでは枝賢本に接する順位をとつたのである。

京都大学に所蔵される元龜二年（一五七二）の写本は、梵舜が十八歳の時であり、枝賢五十二歳、父兼右五十六歳であつた。枝賢が天文五年、十七歳の時、鈔写したのを彷彿させる。

京都大学附属図書館蔵（15601 谷村文庫）

論語十卷 魏何晏集解 元龜二年（一五七二）釈梵舜写 五冊

本書は、釈梵舜の筆写に係ると判断して間違いないだろうが、何晏の序文の部分は原紙を切り取り、そこに原寸通りに紙を貼り、新たに補写している不思議な箇所もあり、或いは、一部、別筆があるかも知れない。いずれにせよ、欄外に、数百年を経た天保年間に本書を用いて講義した記録が記されているから、梵舜の手から再び清家本流の舟橋家又は、庶流の伏原

家に戻ったテキストと考えられ、講義者は、明経博士であった舟橋在賢（文化一年～文久四年「一八〇四」～一八六四）か伏原宣明（寛政二年～文久二年「一七九〇」～一八六二）と考えられる。そして更に、本書は清家本流から伝わった清家文庫には含まれず、後世、市場から蔵書家谷村一太郎が蒐書したもので（谷村文庫）あることに鑑みれば、後に、方々に散じた伏原家伝来のテキストであったかもしれない。

濃紺色艶出表紙（第四冊目は剥落）。二十七・二×二十・四<sup>cm</sup>。題簽は丹色金泥の鳥の子を料紙とし、「論語 一之二」などと墨書する。第一冊の題簽には、更に「圓珠経 枝賢自筆之写本ニアリ」と墨書で加える。すなわち、京大蔵天文五年枝賢令写本（1665）を指して言うのである。何晏の論語序は、東洋文庫所蔵（1744）枝賢天文二十年証本と全く同じ、また、巻第一首も東洋文庫本と同様であるが、

論語学而第一 何晏集解

子曰学而時習之不亦說乎……

の「論語学而第一」題の右に、左に、「何晏集解」の右に、左に の校異を書き入れ（番号は東洋文庫本の解説に準じる）、枝賢天文二十年証本のやや簡略化を行う。すなわち、宣賢点第一次移点本に改訂を加えた第二次宣賢点移点本を生み、これが以後の準的となったのである。

因みに、学而篇に於いて、宣賢第一次点本の字句を、その校勘に従って訂正している箇所を少しく挙げてみると、「孝悌」を「孝弟」に。「導千乘之国」を「道千乘之国」に。「為之政教也」(注)を「為政教」に。「通十為城」(注)を「通十為成」に。「千城也」(注)を「千成」に。「有奇」(注)を「有畸」に。「愛養也」(注)を「愛養」に。「卜商也」(注)を「卜商」に。「而皆歸於厚也」(注)を「皆歸於厚也」に。「為治也」(注)を「為治」に。「近於義」(注)を「近義」に。

「近於礼」(注)を「近礼」に。「有道德者也」(注)を「有道德者」に。「好礼」(注)を「好礼者」に。「知来者也」を「知来者」に。

また、この異同は前述の天文五年枝賢令写本と同じく、本書の源流を辿ることができる。ただし、例えば、巻九の尾題経注字数に、天文五年本「経一千六百五十字」に対して、本書は「経一千六百五十一字」に作り、天文五年本が宣賢点第一次移点本に従っているのを本書は更に訂正している箇所も見つけられる。

無論、これ以外にも校異はたくさんあるが、枝賢系本は全てを宣賢の校異によって変えているというわけではない。ここに中世期の古鈔本成立の最も困難な側面が存在するのである。

本文の料紙は楮紙。四周単辺の墨界、その内郭は二十一・三×十八・二cm。幅二・五cm。毎半葉七行、毎行十四字に書写し、字様も枝賢天文二十年証本によく似、また、次に述べる吉田家本・三十郎本などにもよく似ている。おしなべて、枝賢本の系統は皆同様の字様風格を持ち、その筆勢と書式から一見してその類似性を感得することができるのである。附言するならば、この字様の類似性が室町時代経書古鈔本の大きな特性と認められ、清家の伝鈔本の勢力をここに確認することができるのであるが、同時に、当時、また大きな勢力を誇っていた、関東の足利学校に源を發する数多の古鈔本が類似的字様風格をもつて行われ、かつ、清家系統の古鈔本と全く異なる字様風格で対抗していた学的形勢をも我々は容易に見て取ることができるのである。

本文への書き入れは、訓点(返り点・送り仮名・縦点・附訓・声点・傍注・音注)を墨で加え、ヲコト点・句点・声点・合点を朱にて加える。これらは、本文と同筆か同時期のもので、大部分が、梵舜の手によって為されたものと見て誤らないであろう。第一冊末に、「経」と「紀」に分かつヲコト点図を書し、「唯礼院殿自筆ヲ以テ写之」と梵舜の手で加える。経伝・紀伝の点図の参考に付している。更に、巻十末に宣賢の本奥書を写している。

家本雖有数部本経之異同置字之増減共以一揆其中

有琢磨之秘本以之為準的假手新写之卒予加朱墨

墨葉家点也孫々々々深秘勿出函底矣

侍従三位清原朝臣宣 賢御判

また、その後が続けて、

右以本清家本写之

元龜二年六月三日 梵舜侍者 (花押)

と、梵舜の書写奥書が記される。十代の若書きであるが、前述の『孟子』に記された慶長十七年、還暦の字様に通じる特性が感じられ、誠実な、中世期の学術を、如実に物語るようである。

上欄欄外に、天保年間の清家博士が本書を用いて講義した記録が書き入れられる。すなわち、「天保十一年十月二十二日」から「同年十一月十七日」、少し空いて「同十二年五月十六日」から「同年十二月二十六日」、そして「同十三年二月十一日」から「同十四年六月一日」までで全て十巻を終えている。

以上の枝賢・梵舜の『論語』伝鈔を概観すると次のようになる。

天文五年 (一五三六) 宣賢六十二歳 良雄三十八歳 枝賢十七歳 (『論語』令写)

天文十九年 (一五五〇) 宣賢没 七十六歳 枝賢三十一歳

天文二十二年 (一五五三) 梵舜生まれる

永禄九年 (一五六六) 枝賢四十七歳 (天文版論語に加点) 良雄没 六十七歳

元龜二年 (一五七一) 枝賢五十二歳 (正平版論語に加点) 梵舜十八歳 (『論語』を伝鈔)

天正四年 (一五七六) 枝賢五十七歳 (天文五年鈔本『論語』に加証)

天正十八年（一五九〇）枝賢没〓七十一歳

寛永九年（一六三二）梵舜没〓八十歳

## 五、吉田兼右の伝鈔

吉田（卜部）兼右（永正十三年～元龜四年〓一五一六～一五七三）は、前述の如く、宣賢の男にして梵舜の父である。枝賢は甥にあたるが四歳の年長に過ぎず同年代に属する。神官吉田兼満の嗣となるも宣賢の庇護を受けたから、宣賢系のテキストを多く引き継いだ。『論語集解』の伝鈔は、天理大学附属天理図書館に所蔵される二種の古鈔本を伝え、いずれもその自筆本と推測されている。

天理大学附属天理図書館蔵（123・3113）

論語十卷 魏何晏集解 室町時代末期写（伝吉田兼右） 五冊

本書は、前述の梵舜本と全く同一のテキストで、字様・字句異同・校異など、どれを取ってみても瓜二つの写本である。すなわち、永正九年宣賢定本に基づき枝賢らが改訂を加えたと推定される第二次宣賢点移点本に相当する。桐箱に収納され、蓋の裏に「吉田兼右自筆ノ卜部吉田家伝来」と、それとは別筆で（沖森直三郎氏筆）と鑑定されている付箋があり、これによつて、兼右の自筆本と伝えられるものである。また、各冊に「岡田真ノ之蔵書」と蔵印が捺されることから、吉田家から散じたものが転々蔵書家岡田真の手に帰し、昭和三十年の岡田文庫入札時、沖森書店主が落札したもので、その由緒書きは故なしとしない。無論、梵舜本は元龜二年の書写、兼右は元龜四年に没しているから、いずれが先かと言えば、兼右本が先

である可能性はあるが、その前後はこれらの写本の本質に影響を与える要因とはならない。

薄茶色表紙、原装。二十七×二十二・五cm。題簽に「論語 三之四」などと本文同筆にて墨書する。何晏の論語序、並びに巻一首題の形式は、梵舜本と同一。四周単辺の墨界（内郭二十一・二×十九・一cm）に毎半葉七行、毎行十四字に書す。全巻一筆で、書き入れ（梵舜本と同じ）も同筆。朱のヨコト点も附す。料紙は厚手の楮紙を用い、尾題のありかたも梵舜本と同じである。巻第一の末に、本文と同筆にて、梵舜本の巻十末に記された宣賢の本奥書を写している（改行はやや異なる）。書写字様は、横の線に力があり、梵舜本に比べて力は弱い感じがする。紙質は室町末近世初によく見られる黄味を帯びた上質紙である。次掲の三十郎本にその紙質はよく似ている。

同じく、兼右の書写と伝えられる経文だけで注文を省いた単経本が伝わる。

天理大学附属天理図書館蔵（123・315）

論語十卷 魏何晏集解・単経本 室町時代後期写（伝吉田兼右）二冊

本書は、字様極めて前記（イ3）本に似る。（イ3）本よりは力強い感じがするが、筆裁きは同様である。字句も第一次宣賢点本とは異なり、（イ3）本の第二次宣賢点本移点のものと一致し、（イ3）本の注釈を省いた、本文のみを書写したものとと思われる。

茶色表紙原装。二十七×二十・二cm。桃色に金泥の古い料紙を用いた題簽に「論語 上下」と本文同筆かと思われる墨書がある。外の帙には「吉田兼右筆 天文頃写」と弘文荘の墨書。

魏何晏の序・巻一首は、それぞれ次のように題する（訓点書き入れを施す）。学而の首題下に一篇の章数を欠き、巻二以降に具わるのなどは枝賢本系統の特色を物語る。

## 論語序

叙曰漢中壘校尉劉向言魯論語二十篇

皆孔子弟子記諸善言也太子大傅夏侯

## 論語学而第一

何晏集解

子曰学而時習之不亦說乎有朋自遠方

書式は四周単辺、内郭は二二・二×十七<sub>cm</sub>、界の幅は二・四<sub>cm</sub>。墨による訓点（返り点・送りがな・縦点・附訓）、朱による句点、朱引きなどを加えるが、本文と同筆と思われる。ヲコト点はない（第九子罕篇に少々あるのみ）。料紙は楮紙（イニ）本に比してその紙質は古く感じられる。全巻を通じて一筆であるが、里仁篇の第二丁表の六行目から裏丁にかけて、原紙を切り取り、新たに料紙を貼り付け、そこに別筆で補写を行っている。その補写は舟橋秀賢・国賢の手であろうか。尾題は「論語巻第一」のごとく記し、経注字数は附さない。

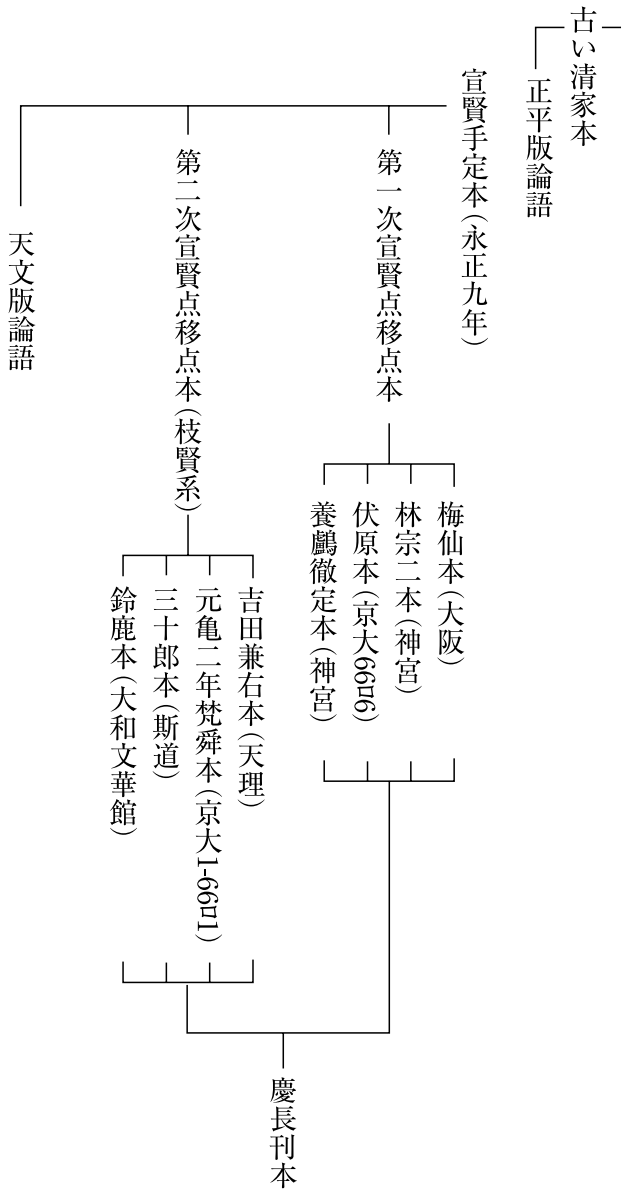
以上二本の伝鈔を見るに、兼右は宣賢の家学を吸収するも、子の梵舜とともに、良雄・枝賢が発展させた第二次宣賢系テキストを伝え、吉田家に『論語集解』の学統を確立したことが伺える。ここに同様の伝本を二本伝えるが、こうした幾次となく書写を繰り返す中世期の秘本伝承は、書写自体にのみ流布の可能性を持ちながら、次第に裾野を広げていったものと思われ、まもなく到来する慶長時代の古活字版を中心とする華麗な出版文化のゆるぎない底力となって、見事に結実したものと総括されるのである。



六、三十郎盛政の伝鈔

本書については、拙論「安田文庫蒐集古鈔本『論語集解』について」(『藝文研究』八七号・二〇〇四)に詳解したのでそれをも参照していただきたいが、要は、本書は梵舜本・兼右本と全く同一の系統で、字様・内容ともに相似関係にあること、更に、末尾に書写奥書で「右本清家秘点也則雪庵道白真筆写之ノ三十郎盛政」とあることにより、雪庵道白、つまり、枝賢本に依ったことが明確に記されていて、本書の価値を高からしめている。三十郎盛政は、枝賢の男国賢の門人であると伝えられる。天正から慶長年間にかけての書写にかかるであろう。この時期になると、門外不出の家伝が緩やかに崩壊して

〔図2〕



ゆく事態がよく理解される。

本書に至るまでの流れを改めてまとめると「図2」のようになろう。

書式は四周双辺、有界、每半葉五行、毎行十五字、内郭は二十・四×十六・四cm。界幅は三・三cm。料紙は楮紙。縹色の古表紙二十六×二十・五cmを包背装にする。全巻一筆で訓点書き入れは本文同筆。朱のヲコト点あり。狩谷掖斎（一七七四～一八三五）旧蔵で『経籍訪古志』著録。安田文庫の蒐集本。

## 七、その他の伝鈔

次に、明確な根拠を欠くが、書風や字句のあり方から、上述の枝賢系統のテキストに属すると判断される伝鈔本に二本が確認されている。一は、近鉄大和文華館所蔵の鈴鹿文庫本で、単経本二冊、一は、陽明文庫所蔵、五冊本である。近鉄本は、天理・吉田兼右本に字様も似、字句も学而篇の「孝弟」、「道千乘之国」、「知来者」など、第二次宣賢点移点系、枝賢本と同じである。陽明文庫本も、字様、梵舜本・兼右本に相似し、字句の異同は、第一次宣賢点移点本と比するに、「孝悌」を「孝弟」に、「導千乘之国」を「道千乘之国」に、「為之政教也」（注）を「為政教」に、「有奇」（注）を「有畸」につくるなど第二次宣賢点移点系、枝賢本に同一である。ただし、「通十為城」（注）を「通十為成」に、「千城也」（注）を「千成」に改訂することはなく、第一次宣賢点移点本の名残を持つ。

大和文華館蔵（鈴鹿文庫5-4145～6）

論語十卷 魏何晏集解・単経本 室町時代末近世初期写 二冊

茶褐色表紙の原装、十六・六×十一cm。丹色の古題簽に本文同筆にて「論語 上下」と墨書する。書品は大振りで重量感を持ち、由緒ある伝本であることを物語っている。筆跡も全巻一筆で、墨色濃厚にして力ある縦線の筆は清家系の特色を伝える。鈴鹿氏は、吉田神社に奉職、吉田家と深い関係にあり、兼右以降の『論語集解』伝鈔の一翼を担ったであろうことは十分に想像される。永祿・元龜・天正頃の書写に係ると思われる。何晏の序、本文巻頭は、

論語序

叙曰漢中壘校尉劉向言魯論語二

論語学而第一 何晏集解 (章数は全篇なし)

子曰学而時習之不亦説乎有朋自

と題す。書式は、四周单边、有界、每半葉七行、每行十四字。内郭は二十一・二×十六・七cm。界幅は二・五cm。本文同筆の書き入れ訓点(返り点・送りかな・縦点・附訓)、朱の句点を附す。後筆による脱落箇所補筆が巻十二にある。料紙は楮紙。尾題は、「論語卷第一」などと書し、経注字数はない。「尚裝/舎蔵」(鈴鹿義一)の印あり。

陽明文庫蔵(近口22)

論語十卷 魏何晏集解 室町時代末近世初期写 五冊

室町の極末期頃の濃い藍色表紙(二十六×二十・四cm)に厚手の濃丹色の古題簽に「論語一之二」などと墨書。何晏の

序・卷一巻首は、

論語序

叙曰漢中壘校尉劉向言魯論語二

論語学而第一

何晏集解

(章数は学而のみなし、他はあり)

子曰学而時習之不亦說乎・

と題す。書式は、四周単辺、有界、毎半葉七行、毎行十四字。内郭は二十一・一×十七・二cm。界幅は二・二cm。本文同筆の書き入れ訓点(返り点・送りがな・縦点・附訓・声点)、朱のヲコト点を附す。尾題は「論語卷第一」などと書し、経注字数を加える。明るい感じの楮紙を用い、重量感あふれる墨痕を伝える。枝賢・吉田家に関係する伝来と考えられ、室町時代も末期、宣賢の第一次移点から、助字の整理、版本との校勘など、やや本文の洗練された或いはまた、自由な改字が許された第二次移点本が斯界に漸く定着を見、伝鈔を重ねて然るべき学問の筋に浸透していった状況を如実に感じ取ることができる一本である。「近衛蔵」「陽/明/蔵」の印記がある。

## 八、結語

以上、八点の古鈔本『論語集解』が、一つの部類に括られることを論じた。清原宣賢に代表される室町期清家の『論語』講読がどのように発展して中世を終えたのか、その理解には、枝賢・吉田家・梵舜などの活動を把握することが肝要である

ことをこれらの伝本は物語っている。そして、この時期、厳格な博士家の秘伝から、緩やかに解き放たれた伝鈔へと講読の姿が変わり、やがて林羅山を祖とする新しい、朱子学による『論語』講読に道を譲ることになる。清家から林家へと儒学が移り変わる、その過渡期とも言える室町後期三代の清家本の伝鈔は、単なる形式的な伝承に終わることのない、気迫のこもった、力強い継承であったことが感じられよう。

とは言え、室町期、清家を取り巻く儒学の環境は、多様な伝承が存在し、『論語集解』の伝鈔も、『論語義疏』や正平版『論語』の影響を受けたテキストが、細流を中心とした学団に流通し、更には足利学校系の伝鈔も全国に広まるなど、その複雑さは想像を絶するものがあり、それらの百種を越す伝本の現存から、一端を垣間見ることができるのである。従って、この潮流のなかでは、寧ろ少数派に属する清家本ではあるが、しかし、宣賢以降の清家の講義活動や啓蒙活動によって、『論語』の様々なテキストや読法において、清家の家学は着実に民間に浸透し、近世の『論語』講読にも色濃く影響を及ぼしているのであって、中世期における清家本『論語集解』の面目は、これら一群の枝賢系古鈔本のなかにも躍如として現れていると言えるのである。